

巻頭言

野生動物との共存は叶うか

関西支所長 北原 英治



さすがに、最近では「人間が大事か野生動物の命か」という極端な意見対立はそれほど聞かれなくなりました。この言葉は、元々、特別天然記念物に指定されているニホンカモシカによる森林被害問題が昭和40年代後半に大きくなり、被害者側と保護者側で論議する際に発せられた言葉です。それまで、森林被害を引き起こす主な野生動物として野ネズミとノウサギが挙げられる程度で、草食性のかれらは生息環境の変化に速やかに反応して個体数を増し、全国的に被害問題を起こしていました。しかし、両者とも中・小型動物であることもあって個体数増減も激しく、また被害そのものも一過性のものが殆どでした。その後、戦後直ぐに植栽した林木が生長するとともに、生息環境の変化適応に時間を要する大型の草食性動物であるカモシカなどが、前出の中・小型動物に代わって個体数を増やしてきました。その結果、造林木の枝先摂食による被害が累積して、深刻な森林被害となったものです。また、同じくニホンジカ、イノシシなどの大型動物も個体数を増やし、全国的に深刻な農林業被害を引き起こしています。さらにニホンザル、ツキノワグマの里山出没など、野生動物との共存を考える素材には事欠きません。

さて、大型草食動物の代表であるニホンジカは、単なる森林被害を引き起こすだけでなく、多様な生物群を育む森林の自然植生を破壊したり、ひいては森林・林業の成り立ちにまで影響を及ぼしています。すなわち、シカは極めて幅広い植物食性を有しており、アセビやモチツツジなどの特定植物を除けば、スギ・ヒノキ苗木とともに林床に生育するほぼ全ての植物を摂食するということです。そのため、シカが生息する森林では林床の植物が無くなり、地表が剥き出しとなり、降雨による土砂の流出まで起こします。また、シカの生存戦略も強かで、餌植物の現存量が不足する場合には、自身の身体の大きさを小さくして、ある程度の個体数を維持することも明らかになっています。シカによる被害軽減や自然植生回復には、現在のところシカに対する積極的な個体数管理しか方法がありません。既に、個体数調整に手遅れの感のある地域もありますが、人々はバンビの瞳に心を奪われている場合ではないように思われます。

九州に次いで人工林率の高い関西地域では、地域性に富んだ森林・林業・木材産業が進展していますが、どこともシカ被害対策に精力が注がれています。また、シカ以外の野生動物についても、被害対策とともに地域個体群の保全策を検討する「特定鳥獣保護管理計画」に沿った施策を講じる府県が増えています。ただ、野生動物との共存を可能にするには、「特定計画」のような応急策とともに恒久的な対策が必要です。野生動物種ごとに森林施業法と森林被害発生との関係を明らかにし、それに基づいて被害を未然に回避し、なおかつ森林生産力を高め、多くの公益的機能を満たす森林施業の技術体系を確立することが必須です。